ＩＫＧの旅館経営再生塾

第１６３回　ＰＤＣＡを再認識しませんか？

㈱飯島綜研 代表取締役社長　孫田　猛

旅館業は基本的に生業家業に属する経営形態をとっているところが圧倒的に多い。この場合の弱点としてＰＤＣＡ（計画・行動・検証・再実行）のサイクルが非常に甘い、もしくは途中で切れてしまっていることが多い。それ以前にこの重要性について、全く認識していないことが大問題だ。

私が旅館経営者に初めて会った時に必ず確認することのひとつに、このＰＤＣＡがどのレベルなのかがある。つまり、この旅館の経営計画書の有無、あればその内容の確認。次にこれをどうやって行動に移しているのか、かなりの確立で計画を達成させることが出来る行動の手段が行動前に確立されているのか？

行動した結果をどのように検証し、問題点と改善方法を必ず遺漏なく導き出しているか？そして中途半端で終わらせないで、再実行し、計画を達成しているか？もしくは計画を修正して再実行しているか？というプロセス確認だ。

これが最大限行われているのであれば、われわれの出る幕などはない。しかし現実には、あいまいな計画のもと、行き当たりばったりで行動し、計画とは大きく乖離した実績に失望し、その後うやむやになってストップする。そしてある時期が来てまた同じ繰り返しをする。このパターンが実に多いのである。

経営者自身もこれではいけない、同じ事を何度も繰り返しているのではだめだ、という認識は少なからずある。でもそれを抜本的に変え、自らのＰＤＣＡを質的にアップさせ、必ず実現させるという厳しい姿勢で取り組もうとしている経営者は残念ながら少ない。

これは規模の大小を問う話ではない。経営状態が結果的にうまく回っているときは、「いけいけドンドン」でこんなことをいっても聞く耳をもたない人が多かった。でも、経営状況が悪化し、危機感を持った人なら、改善を打開するためのプロセスとして、ＰＤＣＡの重要性に気づくべきだ。もちろんＰ（計画）そのものが的を射たものかどうかという、戦略的な前提はあるのは言うまでもないが。

今までのやり方が通用しなくなっている時代において、行き当たりばったりの経営では先が見えている。

http://ik-g.jp
e-mail:magota@ik-g.jp